

## PC-332

### 強い離床不安があったAMI症例に簡易型エルゴメーターを活用したりハ治療経験

松江赤十字病院 リハビリテーション課

○佐々木 順一、笠木 重人

【はじめに】今回、AMI後にVF、VTが頻発し強い離床不安をもった症例に対して、簡易型エルゴメーター（以下簡易エルゴ）をリハビリに取り入れ、社会復帰に至った経験をしたので報告する。

【症例】70歳男性。2013年7月他院より心電図異常を指摘され、当院紹介となる。CAGにて2枝病変が見つかり、同年9月にPCI施行。退院3日後、ターゲットゴルフ中に胸部不快と冷汗ありAMIを発症。2枝同時の亜急性冠閉塞疑いにて再入院。既往歴：糖尿病、高血圧、小脳梗塞

【経過】第2病日にVF→DC、挿管となる。第4病日経過良好にて抜管。AMIパスによるNsのリハ開始。第10病日VF再発。第11病日目にCCU入院中にリハ依頼あり。初回リハ中に嘔吐あり、ショック状態となった。VT頻発、NPPV開始。主治医の指示のもと第13病日からリハ再開となった。以上の経過からリハ再開時より症例の離床に対する強い不安感がみられた。リハはモニター下でベッド上の運動から開始し、病室内歩行練習まで実施。第20病日からCCU内で簡易エルゴを開始し活動性を高めた。第20～27病日間は午前ベッドサイドでの簡易エルゴによる負荷運動、午後は歩行練習距離延長の2回/日のリハ介入を実施。その後、自転車エルゴも可能となり、第28病日連続240m歩行が可能となった。第34病日目は自宅退院となった。CPXの結果は退院前と退院後6か月を比較して著明な改善がみられた。現在は好きな松江城のボランティアガイドも可能となり、毎日30分程度の散歩の運動習慣ができた。

【まとめ】症例はAMI後病態が不安定であったことから、離床不安が大きく退院後の生活にも悲観的であった。簡易エルゴにて負荷運動を導入することが、積極的な離床のきっかけとなり、歩行や運動負荷に対する不安感を軽減し、運動持久性を改善させ社会復帰に至った。

## PC-334

### 当院における8年間の発達障害児に対する作業療法対象児の動向と今後の課題

飯山赤十字病院 リハビリテーション科

○森 央美、吉川 領一、大月 肇、本山 奈菜

【目的】当院では2006年5月より、子どものこころ相談室を受診した発達障害児の作業療法（以下OT）を開始し8年が経過した。これまでの対象児数、疾患、年齢、開始・終了年齢、受診理由について特徴と傾向を把握し、今後の課題について考察する。

【結果】8年間のOT対象児は73名。疾患はアスペルガー症候群・自閉症等の広汎性発達障害、注意欠陥／多動性障害、学習障害、知的障害、ダウン症、発達性協調運動障害があげられ、重複した障害を持つ児が多い。4～10歳児が8割を占め、開始年齢は6.7歳児が多く、終了年齢は6～12歳であった。終了児の継続期間は4年以内に8割が終了し、終了理由は「適応・希望」が多くを占める一方で「不明」も3割と多い。担当作業療法士（以下OTR）は現在2名で入院業務との兼務であり、実施頻度は減少している。開始時年齢別受診理由の分類では、未就園児は「認知」「言葉」「運動機能」があげられ、園児～就学前後の児は「対人関係・集団生活・社会性」「感情のコントロール」「多動・落ち着きのなさ・集中力低下」が多い。

【考察】対象児数や実施頻度の変動については発達障害児担当OTRに限られ、その勤務体制により時間を費やせないのが実状である。今後、療育の充実化として検討が必要と思われる。

開始時期や実施年齢から、集団生活が始まる園児期から就学前後に医療・療育の必要性が示唆される。OTRは保護者・児・関係者のニーズを把握し、OTの目的・手段を選択している。ニーズは成長に伴い変化することが予測されるため、目的の達成度の確認と定期的なニーズ把握・目的の変更が必要と考える。OTは1対1での実施が中心であるため、集団場面に対する介入について、より発展させた対応が今後の課題と考える。

## PC-333

### 当院の乳癌術後リンパ浮腫発症例の検討

石巻赤十字病院 リハビリテーション課<sup>1)</sup>、乳腺外科<sup>2)</sup>

○山内 綾子<sup>1)</sup>、古田 昭彦<sup>2)</sup>

【はじめに】当院では手術を受けた乳がん患者に対し理学療法士がリハビリテーションとリンパ浮腫指導を行っている。今回、乳がん術後にリンパ浮腫を発症し、リンパ浮腫外来へ紹介となった患者の内訳・症状・経過・その後のセルフケアの実施状況について調査したので報告する。

【内容】2012年4月から2014年3月までの2年間に手術を施行し、その後リンパ浮腫を発症しリンパ浮腫外来へ紹介となった患者の術式・浮腫の種類・発症までの期間・治療内容について検討した。

【結果】2年間に手術を施行した患者は242名で、そのうち8名が術後リンパ浮腫を発症しリンパ浮腫外来へ紹介された。術式の内訳は乳房全摘出術8名、温存術0名、腋窩郭清7名、センチネルリンパ節郭清1名であった。国際リンパ学会の分類ではI期4名、II期4名であった。術後からリンパ浮腫発症までの期間は手術直後が2名、3か月以内が2名、半年以内が1名、それ以上が3名であった。治療内容としては、セルフケアのみの指導で終了となった方が4名、弾性着衣等の圧迫療法が必要と判断された方が4名、集中的な通院での治療を要すると判断された方はいなかった。

【考察】当院では理学療法士がリンパ浮腫外来を兼務しており、術後のリハビリテーション及びリンパ浮腫治療に携わっている。リハ科では、術後にリンパ浮腫についての説明・セルフケアを説明しており、退院後も実施していた方は4名、未実施者は4名であった。今回発症された患者の半数は、退院後もセルフケアを継続しており、症状も軽度のうちに発見し治療に取り組むことができたと考える。これは発症前から病態を説明し、理解していただくことを理学療法の中に組み込んだ結果と考える。今後も早期発見・治療につながるように継続していきたいと考える。

## PC-335

### 当院での発達障害の作業療法

### 母親との協働により集団参加が可能となった一例

岐阜赤十字病院 リハビリテーション科

○野口 翔

【はじめに】作業療法（以下OT）の成果は参加がもたらす満足という観点から判断される。当院では、外来にて発達障害児へ感覚統合を中心としたOT介入を行っている。そこで、病院という実際の生活の場から切り離された環境での関わりの中で、参加レベルの向上が可能であるか、事例を通して検討した。

【事例】H君、6歳1ヶ月、男児。当院を受診し、注意欠陥多動性障害と診断され、OTが処方された。お絵かきなど作品づくりを好む。

【初期評価】COPMにて母親のニードを聴取した。「集団の中で友達と仲良く遊べるようになること（遂行度3、満足度3）」を目標とした。注意が転導しやすく、遊びが次々に変化する傾向があった。アイデアの共有は困難で、児の提案による一方的な遊びになりやすかった。それらの背景には、姿勢制御および眼球運動制御の未熟さと身体図式の曖昧さがあり、他者のベースに合わせることを困難としていることが考えられた。

【介入】児が優位になる遊びを展開する中で、姿勢制御と眼球運動制御の改善を図った。また、週1回の外来での介入のみでは量的に不十分であると考えたため、母親に児の特性を感覚統合の視点で説明し、家庭でも行える遊びの指導を行った。さらに、OTで遊んだ内容を見と共に絵にしてくれるように依頼し、身体図式の改善を図った。

【最終評価】COPMは遂行度8、満足度8に向上した。母親は「ルールのある集団遊びに参加ができるようになった。発表会では最後まで役を演じることができた」と語った。

【考察】外来でのOT介入と母親との協働によって、児の集団参加が可能となった。しかし、実際の集団参加の評価は母親の語りからの推測にとどまっており、評価として充分とはいえない。より高い成果を出すためには、実際の参加状況を評価する手段を検討していく必要があるだろう。

一般演題  
（ポスター）  
10月16日（木）